VII－13　　地方都市圏の拡大過程に関する一考察

九州工業大学　正員○佐々木 昭士
九州工業大学　学生員　国広 俊夫
西部エンジニアリング　正員　佐藤 伸直

1　はじめに

地方都市においても，通勤，通学を始めとする影響圏の拡大が見られる。このような都市圏は，交通施設など都市施設の計画にあたって検討しなければならない問題の一つである。先に，福岡県内における都市圏の現状を解析し，報告した。[1] その結果，福岡県は第3次産業を中心とし顕著な拡大を示す福岡市を中核とする都市圏と第2次産業を中心として安定した北九州市を中核とする都市圏の2大都市圏が大きな影響を及ぼしている。この2都市圏は典型的な地方都市圏の特徴を示していると考えられる。

本報では，これらの都市圏の中間に位置し，ベッドタウンとして人口急増の宗像町自由ヶ丘，日の里両地区の入居状況をアンケート調査を実施し，地方都市圏の拡大過程について一考察を行なった。

2. 調査地域の状況ならびに調査方法

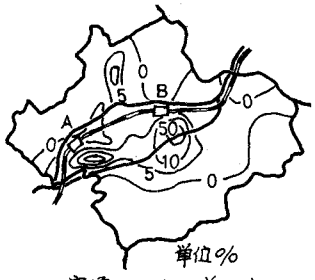

図-1　宗像町の人口増加状況
（昭和51年より昭和52年）

図-1に示すように宗像町は東郷駅A南側の日の里地区と赤間駅Bの南側の自由ヶ丘地区の両地区を中心とし，福岡，北九州両市のベッドタウンとして顕著な発展を遂げている町である。

なお，昭和38年から自由ヶ丘は森林都市として，昭和40年から日の里地区は住宅公団がアパートを建設し，現在宗像町の住宅建設の多くはこの地区に集中している。

今回の調査は，両地区について表2に示すように対象戸数に60％をランダムに抽出して実施した。

アンケートは家族数，年収，職業，勤務先，駅までの所要時間，住宅の種類，前住所，入居時期，住居面積，選択理由（利用交通機関）の11項目について，回答をハガキで求めた。

なお，配付は研究室の者が1日で趣意書と返信ハガキを封筒に同封し各戸に行なった。回収状況は表のように33.7％であった。

3　調査結果とその考察

家族数は日の里が3.6人，自由ヶ丘が3.7人の平均となった。また，年収も377万円，424万円などから中産家庭で職業が，第2次ならびに第3次産業に従事していることからも明らかである。

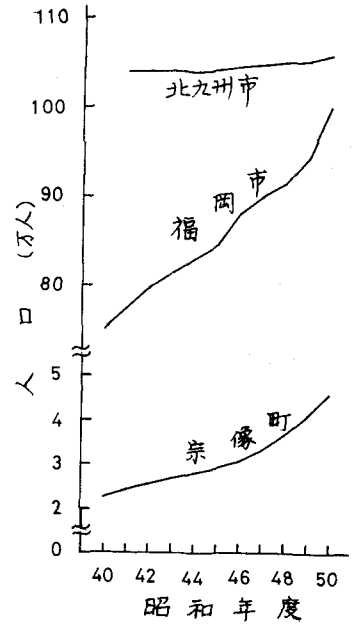

図2　人口の推移

表2　調査地区戸数と調査数（昭52.8調査）

	地区	アンケート数		
	戸数	配布	回収	回収率
自由ヶ丘	1605	1000	359	35.9%
日の里	3499	2000	651	32.6%
合計	5104	3000	1010	33.7%

図3に入居時期を図示した。図のように，森林都市として開発された自由ヶ丘地区は昭和40年から昭和49年にかけて漸増していたが，経済不況の発生とともに入居が停退してきた。日の里地区は公団の建設数に大きく影響されているが，自由ヶ丘地区と同様にその入居数も昭和50年

表2　前住所と勤務地の関係

日の里地区

勤務地＼前住所	先代より	北九州地域	福岡地域	県内	県外	合計
福岡地域	5	54	137	31	68	295 (45.3)
北九州地域	3	162	34	20	16	235 (36.1)
宗像町内	4	11	12	12	7	46 (7.1)
宗像周辺	2	8	7	10	6	33 (5.1)
その他	0	13	13	5	11	42 (6.4)
合計	14 (2.2)	248 (38.1)	203 (31.2)	78 (12.0)	108 (16.5)	651

自由ヶ丘地区

勤務地＼前住所	先代より	北九州地域	福岡地域	県内	県外	合計
福岡地域	0	41	38	9	10	98 (26.1)
北九州地域	0	165	8	12	14	199 (52.9)
宗像町内	3	7	4	7	3	24 (6.4)
宗像周辺	0	4	0	5	2	11 (2.9)
その他	1	11	7	10	15	44 (11.7)
合計	4 (1.1)	228 (60.6)	57 (15.2)	43 (11.4)	44 (11.7)	376

※　(　)は%を示す

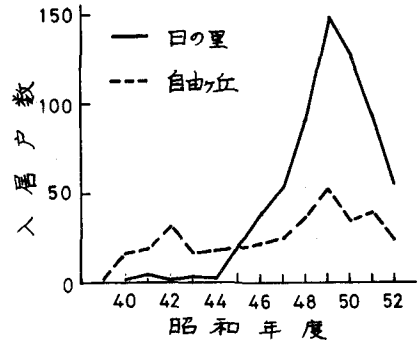

図3　入居時期

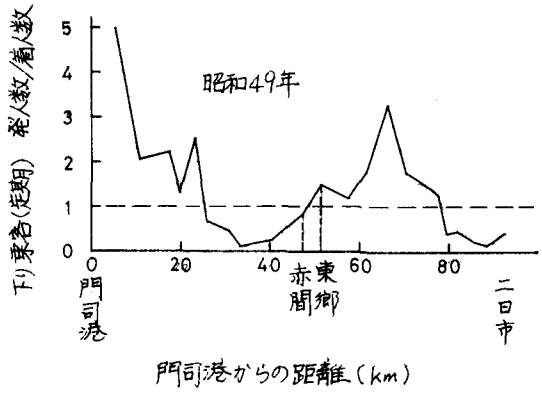

図4　鹿児島本線(北九州福岡)定期乗客数[2]

以降減少している。

前住所と勤務地の関係を表2に示した。両地区とも北九州，福岡両市の勤務者がそれぞれの市から転居してきた場合がもっとも多く，選択の理由に環境の良さが多いことと併わせ，環境の良い北九州福岡西部ベッドタウンとして発展して今日に至っていることを示している。なお，北九州市の影響が福岡市よりも大きく，とくに日の里地区りも自由ヶ丘地区の方が著しく，図4の鹿児島本線の定期客の数からも明らかで，自由ヶ丘地区に近い赤間駅は北九州方面への通勤通学者が多いが，日の里地区に近い東郷駅では逆に福岡方面が多くなっている。詳細については当日検討結果を報告するが，この一二年は福岡市からの入居が北九州市よりも多くなる傾向にあり，また，県外から入居して福岡市へ勤務している者がかなりの数見られるが，北九州市への勤務は比較的少ない。これらから北九州，福岡両市の市圏の拡大状況を示している。

北九州市は第2次産業が中心であり，福岡市が第3次産業が中心であることを考慮し，それぞれの従業者数を x_1, x_2 として重回帰分析を行なった結果，宗像町の人口 y は次の直線となった。[3]

$$y = -24851 + 0.17x_1 + 0.08x_2 \qquad (人) \qquad (重相関係数\ 0.95)$$

謝辞：本研究の調査にあたり九州工大渡辺義則講師を始め交通工学研究室の大学院ならびに学部学生の諸氏に協力を頂いた謝意を表する。

参考文献

1) 浅田，境，佐々木：北九州地方の人口動態について，第32回年次講演会集
2) 福岡県統計協会：福岡県統計年鑑（昭和49）
3)　〃　：福岡県勢要覧（昭和40～51）